

信州に住まいする山仲間のSさんから「新聞に文章を載せた」と送られてきた。

Sさん：<区長をすることになり、要望書や、お願いに行く関係で茅野市の職員の方と親しくなり、茅野市の歴史や地理も知る機会を得た。その中で、茅野市民も縄文時代から続いているこの地の文化の高さに誇りを持っていることも知った。そもそも、こんな寒い処で何千年も前から住んでいるのかと言う事も不思議なことであるが・・・>

こんな文章で始まっている。区長というのは町内会長のことかなと、Sさんの姿を思い出し、細い長身を折り曲げ、笑いながら皆様と相談話をしている姿を想像してしまった。何年か前に、滋賀県の美術館で“土偶展”を見たことを思い出した。日本列島のたくさんの場所から、縄文土器と同時代の泥人形、土人形が出土している、それらは、火で焼かれテラコッタ状態で掘り出されている。何のために作られたか、だれが作ったのか、800度の熱をどうして作ったか、乳房や臀部の女性が多いのか、なぜ大量に破棄されたのか、色々わからないことがあるそうだけれど、魅力的な土偶がたくさんある、よくもこんな形を考えたものだと感激している。たくさんある土偶の中に、通称“縄文のビーナス”オレがよく行く、登っている八ヶ岳の麓、尖石縄文考古館（とがりいし、オレは別称：トンガリイシと呼んでいる）に飾られているのを始めて見たのは40歳代のころ、「ほおお きれい」と叫んだのを思い出す。

Sさん：<以前に尖石縄文考古館の学芸員をされていたOさん、縄文のヴィーナスの頭に大きな帽子をかぶっていて、その周長が身長に等しそうだと言う事に気づかれ、話して下さった。そこで、ミロのヴィーナスの各寸法が黄金比で説明されることを思い出したので、縄文のヴィーナスの中にも縄文人の美的センスを数値的に見いだせる可能性に気が、頭頂から臍（へそ）の位置の距離と身長比を見ると、黄金比に近い値になることを見つけた。ミロのヴィーナスは、臍から下の下半身が長い黄金比である八頭身美人に比して、縄文のヴィーナスは臍から上部が長い黄金分割された形状をしている。>

黄金比、「おお 懐かしい言葉 絵の勉強を始めたころ 聞いたことがある」ということで調べてみた。<golden ratio>1:1.168・ はがきは1:1.5なので少し細長い。古代ギリシャの数学者：ユークリッド作。この黄金比を支持、肯定、信じる人々は、古代建築のパルテノン宮殿、ミロのビーナス、現代では美人顔の比率、車のトレッドとホイールの比率が黄金比だと枚挙にいとまがない。これに対して反対する人もいる。人間の身体の色々な部位の寸法の比率がこの黄金比に近いとはいえ「こじつけじゃないの」有名な絵画、建築の比率もしかり、「こじつけじゃないの」とおっしゃる。オレは黄金比が絶対とは思わない派、それ以外の比率も美しいと思っている。それこそ1:1もきれい、いかなる数字でも上手く処理すれば、比率の中に他の要素を入れていけばそれぞれがきれいだ、むしろ黄金比だけがきれいだとは思わない。美術品を見るのは、魂を揺らす、感動を呼ぶ、涙を流す、そういう感情作用もいいが、それだけじゃなくて、美術品を見て、いろんな部位を計測する、計測してそれらの関係を組み立てる、材料や素材を考える、工程を考える、数学・物理・化学・生物というようなジャンルの違う意見・知識を駆使して、美術品を見る、そういう見方もあっていいじゃないのかな。

人々が八ヶ岳の麓に定住するまでは、彼らは流れ者だった。獣たちと同じように食料を求め、生きやすい場所を求め放浪していた。1万年前ぐらいから八ヶ岳の麓に定住を始めた。小屋のような家を作り、木の実を集め、鹿や猪を獲り、虫や魚を獲り、稗や粟を栽培したかもしれない。シャーマンやアミニズムの宗教があったかもしれない、喜びの日、悲しみの日が訪れ、祭りや踊りを舞ったかもしれない。たくさん土偶を造って飾ったり壊したりしたかもしれない。そんなたくさん土偶のひとつがたまたま掘り出されて見つかった。土をこねて形を造り乾燥させ、それを焚き火の中にいれ何時間かあとに掘り出せば、テラコッタができた。縄文土器といわれる壺や鉢、あらゆる食器もそうして造った。いずれにしても、日本列島独特の縄文式土器・土偶を見るにつけ、「なんとおもしろい形 なんてこんな形 だれが造ったのかな・・・」彼らの顔を思い浮かべ、こういう縄文土器時代があったことに感激。

Rowan Jacobsen 著<ハチはなぜ大量死したのか>何年か前に、それまでいつでも買えた蜂蜜がパタリと無くなり「ミツバチがいなくなった」と聞いたことがある。最近では価格が以前と同じように高いけれど品物が店先にあると思う、とはいえ、オレ自身蜂蜜はあまり食べないのでそう詳しくはないが。本の内容は2006年アメリカで始まったCCD：蜂群崩壊症候群(ほうぐんほうかい)という現象、なぜ急にミツバチが一夜にいなくなったかという現象、原因は確定していない。ミツバチの寄生虫であるダニ・ストレス・異常気象・電波障害、というようなことが色々考えられたがいまだに原因は確定していないらしい。ミツバチの大量死、CCDはアメリカ、ヨーロッパ、インド、日本、ブラジル等で発生している。この本の中に、興味のある話、知らなかった話がたくさん出てきたので、紹介します。

◎昆虫は1億5千万年にわたって、花を付ける植物の生殖を手伝ってきた。大部分の植物が生殖を昆虫にたよっている。受粉に一番はげんでいるのがセイヨウミツバチだ。他の昆虫も受粉の手伝いをするが、ミツバチが圧倒的だ。

◎もちろん昆虫が善意で仕事をするわけではないから、植物はたんぱく質豊富な“花粉”と“花蜜”を用意している。虫が蜜をたくさん集めようと次の花に移るときに、別の花の“雄しべ”の花粉が“雌しべ”に着く。これで生殖が完了し、花から果実が誕生する。植物は動物に果実を食べさせ、その種を運んでもらう、その地で新たに植物が育つ。太古から植物と動物の盟約で、植物にとっても動物にとっても、今まで上手くこの共生関係は機能していた。◎ブルーベリー、チェリー、メロン、リンゴ・桃・梨・梅・ナス・タマネギ・・・といった人の食料となる果実がミツバチのお世話になっている。世界の食料100種類のうち、70%はミツバチが受粉を媒介している。

◎花の中には自分の花粉を使って自家受粉するものもあるが、生殖の本来の目的のために、他の個体からの受粉でなければならない。風によって花粉を飛ばす植物(スギのように)もあるが、近くにいる植物同士しか受粉しにくい。

◎20世紀にはいってもアメリカの多くの地域では、ミツバチが多くの作物の活力を盗んでいると信じられていたので、養蜂家は肩身が狭かったが、最近では引く手あまたで、受粉料金まで発生している。

◎広大な地域に咲く花に、飼育されたミツバチの群れが受粉させていく。数において、勤勉さにおいて、知覚能力も、花粉を運ぶ体の構造も、ミツバチは他の昆虫より優れていた。

◎農業規模が大きくなり、ミツバチの需要が大きくなり、ミツバチ業者は大型トラックでアメリカ大陸を走り回った。

◎生息環境の破壊、農薬中毒、外来種の出現。生物学者のレイチェル・カーソンは、新種の農薬や殺虫剤が、鳥の鳴かない「沈黙の春：Silent Spring」をもたらすと警告した。農薬の害、化学薬品の害を訴えた。

◎「CCDの原因はこれじゃないの？」と指摘されたのが“夢の農薬”といわれたネオニコチノイド系農薬。今までのものに比べ人体への影響が少ない。植物の内部に浸透する。少量で効果が長続きし、あつかいが簡単。ところがこれはれっきとした農薬、病害虫には効果がある、虫であるミツバチにも効果があるはず、この農薬が出始めたころから、CCD現象がおき始めた、ミツバチの姿が消えた、この農薬が原因では。

◎2000年代、アーモンドは金のなる木になった。いかにその生産量を増やすか。経済効率を第一に繁殖戦略が練られ、ミツバチは巻き込まれた。冬のカリフォルニアに500キロに及ぶ帯状の地帯にアーモンドの花が咲く。車で何時間走ろうとも白い花は続く。世界の80%のシェアを占めている巨大産業だ。果肉を食べる果実は、大きな実を得るために、ほんの10%の受粉でいいが、種を食べるアーモンドは、その花の100%の受粉が必要だ。アーモンド果樹園には大量の受粉昆虫であるミツバチを投入させなければならない。

◎予防原則という言葉を知った。環境に対し甚大な影響をおよぼす恐れのある物を、その因果関係がじゅうぶんに証明されなくても、予防措置をとる。例を挙げるなら、地球温暖化現象における二酸化炭素の排出量がオゾン層を破壊しているのでは。二酸化炭素の排出量が原因だとは確定していないが、排出量を減らそうという働き。

◎訳者あとがき：農業において日本でもアメリカ型の大規模農業を目指すことが主張された。大規模、機械化、効率化、高利益というように「工業化された農業」が主張された。

◎オレ：読んでみると、営利優先のアメリカ社会、なにからなにまで、かねの話、営利の話かな。「日本でもアメリカにならえ おくれをとるぞ」と煽る人が多い。

比良さんに登ってきました。一ヶ月ぐらい前に「2月7日に会いましょう 登りましょう 去年と同じところに行きましょ うで美味しいものを食って 一杯やりましょ」と決めていた。その日が近づきメールが飛び交った。

「2月の7日会いましょ 列車は新快速 敦賀行 大阪発7:45 発高槻8:00 京都発8:15 各自先頭車両に乗り込む 北小松で降りる」

「料理は中華鍋を止め おでんを それを温めて食べる おでんでゆっくり」

「皆様 各自料理1品頼みます お酒も各自持参ですよ」

「去年Mさんのマリネ Sさんの南蛮漬け おいしかった」

「マリネは 何マリネ 去年はサーモンとキノコの二種類 スコップ了解」

「南蛮漬けは 無理かも」

「はんぺん希望します！干支ワインを栓抜きと共に持って行きます」

9:15 湖西線：北小松駅から歩き出した。すぐに登りの道路、この辺りは昔ながらの古い家ばかりの地域、新しい家が少ない、よそからの人が住みついていない昔ながらのたたずまい、なのにゴミ置き場のように鉄くず、古自転車、廃車の部品が、建築廃材が積まれている、やだネエ、そぐわないネエ。フワリと雪が舞っている、目で見えるぐらいに大粒のフワリだ、結晶そのままと見まがうような尖った形。手前の山が霞んでいる、雪が積もっての白さじゃなく、雪が舞っての白さ、雪はまったくない、降るか降らないぐらいの雪が舞って霞んでいる。この季節に何度もここを歩いたが道に雪がないとは驚き。今日の天気予報は、晴マークが出ていた、昨日は曇りマークだった、その何日かまえは降水確率50%だった、雪の少ない今年の気候、いつもの年なら雪が降る地域だけれど、今年は雪ではなく雨に降られるかも知れない、「雨なら中止だな 雨の山なんていやだもんね」と思っていた。今は太陽が隠れてはいるが明るく晴れてはいるのに雪が舞っているというケタイな天気。寒風峠までいけば雪があるかねえ、いくらなんでもあそこまで行けば雪が積もっているでしょう。

小・中学校の先生の二人の会話が続く。シロアリから腸を引き出し、腸の中にある微生物を取り出して観察する。「シロアリのような小さいやつにも 腸があるんだ どうして引き出す どうしてその腸を裂く どうして微生物をプレパラートの上に乗せる」どうしてという疑問詞の羅列、オレには未知の世界、「どんなヤツがいるんでしょうネエ 見てみたいネエ」もうひとつは何種かの砂があり、その砂をじっくり観察して、どこからきた砂ですかということに答える実験。砂粒の大きさ、削れ具合、中身の検証それらをムシメガネで観察して「どこのどのあたりの砂」と学習。「礫（さざれ）と呼ばれる小石、砂利が固められて岩となる、その岩が崩れて砂利となる」「おおお さざれ いしのいわおとなりて こけの むうすうまあで」地学の授業を受けたことがあるが、土も石も、火山も海も興味の対象にはならなかった。数学は好きだったけれど、実験やら観察やらには興味がむかなかった、という少年時代だったんだね、オレは。それから天皇制の話、人権の話、30歳代の若き小・中学教師先生の情熱的な話が楽しく続く。

去年同様、1時間少し登ったところで、「テントを張ろう 雪で机を作ろう」「ここで待っている 飲んで待っているの で 登ってきて」ということで登り始めた。2時間も登ると雪が積もっているが、量は少ない、堅くしまつて潜らない、ラッセルもない、一歩ずつ雪を踏んで登る、風のきついところは土肌さえ見える。ズボ足で登った、若者にケツを押されペースが速い、1時間少し登るだけだからと休まずに登る。曇り空、下の方に琵琶湖が見える、明るく見えるので晴れているのかもしれない、風に吹かれた湖の水面が揺らいで見える。エリがある、船がある、水辺の集落が見える、道路と線路が見える。

美味しい飲み食いの宴が終わり夕方の雪の中、温度が下がってきた、ヤッケに舞い落ちる雪の音がプチプチ。「ひとりで座っていたら でかいケモノ クマとはちがう シカでもない 黒い大きなイノシシだった」「こっちがじっとしていると 向こうもあわてて逃げる様子もなく じっとこちらを見て 行ってしまった」

本を図書館で借りる、借りたい本があるとは限らない、あの本が借りたいと決めて出かけてもその本がその図書館にあるとは限らない、だれかが借りていて現在はないということもある。そのかわり無数の本がある、買えば数千円はするような豪華本も借りられる。図書館に通うようになって、この人のこの本と決めていってもないときが多い、この人のこの傾向の本と決めていっても難しいことが多い。そんなこんなで、行く前から今回は、この人の本、この話の本、この傾向の本、というように気持ちをあいまいにして、書架の前に立つと、思わずそれがあったり、「ま いいか」と借りた本が意外とおもしろかったり、いいかげんな借り方、いいかげんな読み方ですがお許しを。市の中央図書館が改装工事ですばらく閉じていた。車で出かけなければならぬついでに、他の図書館で借りている本を積んで出かけた。時間の都合で図書館に行くもよし、行けなくてもよしということを出かけた。いつもは自転車でいっている、車で行ったことはない、数年前から全市の公共建物付属の駐車場が有料になった、とはいえどこでも同じだと思うが、最初の30分は無料、それ以降、30分おきに100円追加という料金設定だと思う。用事を済ませて豊中から茨木市に帰ってきた時点で、寄れるなと思い車を回した。市の図書館は今まで8冊借りられたが、改装後は制度が変わって20冊も借りられるというが、そんなには読みきれないので今まで通りにしようと思っていた。建物が改装されたというが見た目には変わらない、勝手知った書架を探しながら「フクオカハカセ」の名前が出てこない、最近こういうことがよくあって、この物忘れというか健忘というか認知というか痴呆というか、には悩まされている。エエイ思い出すまで蒙古来襲の本と、柳田國男の本と、歩き回っているあいだにハカセの名前がやっと出てきた、「生物」横を見ると「分子生物」という項目に「フクオカハカセ」の動的平衡が目に入ったので、急いで手にとった。

<フクオカハカセ>この先生はよくTVで見かけた、生物番組の解説にでてくる、おしゃれな服装におしゃれなメガネということだけが頭の隅に残っていたが、先日何気なく借りた本が先生の著作、「ちょっと待てよ これはひょっとして あのおしゃれ・・・」と著者の写真を見ればモノクロの小さい写真ながら「おお やはり あのおしゃれ」と以来おおいに気に入っている。この方の発想、文才、感性が気に入っている。

福岡伸一著<動的平衡>

動的平衡は生命観であるとともに、世界観でもある。動的平衡によって生命を再解釈することは、世界を再定義することでもある。近代の思考は、あまりに要素還元論的に世界を分解し、その組み立てとして機械論的に生命を、そして世界を捉えすぎてきた。アルゴリズム的因果律として、世界の成り立ちを考えすぎてきた。この必然的な帰結として、私たちがどのようなリベンジを受けつつあるか、それは昨今起こった様々な災害や事故のことを思い馳せれば明らかである。動的平衡は、古くて新しい世界観であり、機械論的、因果律的な世界観に対するアンチテーゼ、あるいはアンチドット（解毒剤）としてある。

動的平衡という場においては、合成と分解、酸化と還元、エネルギー生産とエネルギー消費、コーディングとデコーディング、秩序の構築と無秩序の生成、そういった相反することが同時におこなわれる。そこには明確な因果律がない。原因は結果となるが結果もまた原因になる。そして同じ原因は同じ結果を二度と生み出すことはない。動的平衡という場においては、すべてが一回性の現象として生起する。その上でそこには一定の平衡、一方向の反応とその逆反応との間の速度にバランスが生み出される。そのような動的なものとして生命を再定義したい。それが動的平衡である。

柔らかさ、温度、揺らぎ、粒だち、可変性、回復性、脆弱さ、強靭さ、かたち、いろ、ながれ、渦、美しさ・・・私たちはたとえ言葉にできなかったとしてもそれらが生命の重要な特性であることに気づいている。

肉体というものについて、私たちは自らの感覚として、外界と隔てられた個物としての実体があるように感じている。しかし分子レベルではその実感はまったく担保されていない。私たちの生命体は、たまたまそこに密度が高まっている分子のゆるい「淀み」でしかない。しかもそれは高速に入れ替わっている。この流れ自体が「生きている」ということである。

「雪かきに 出発」心はずませ富山に向かっているが「今年は 雪があるだろうか」と首をかしげながら、車は湖西道路を走る。この道は高速道路として一部ができた当初は有料だったが、いつの間にか自動車専用道路になった。無料になったからか、大津・敦賀間はいまだに完成しておらず、名称も国道 161 号線のままで制限速度も 60 キロである。安曇川あたりから右にそれると湖岸を走る湖岸道路、琵琶湖の水際を走る。砂浜に松林、海水浴場と書かれた看板がある。琵琶湖は北に行くほど人口も少なく昔のたたずまいは素晴らしい。トビが飛んでいる、「おお とんびだ 大阪では 見なくなったな」と彼らの飛翔を見ていた。子どもころには大阪の田んぼにもトビがたくさんいた。「とんびが くるりと 輪をかいた」「ピーヒョロロ」なんて日常茶飯事だったけれど、もう長い間住まいの辺りでは彼らを見ない、なぜだか調べたがわからない、恐らく家が建て込んだ場所、広い自然が残っていない場所では住めないかもしれない。もちろん安威川にもいない。海岸や山に近づくと彼らの飛翔がよく見られる「あれは タカ」「トビだよ」尻ハネの形が違らしく、タカかもの期待に反して答えはトビだった。同じような大きさ形なのでわからないが、調べると、トビもタカ科の猛禽類だそうだ。大阪では、トビがいなくなりカラスが群れをなしているのが不思議だね。

福井県に入ったころから小雪が舞い始めた。昨日まで春の陽気だった、いつもの安威川にも薄着で出かけていたが、一夜明け寒気が戻ってきた。雪が大粒になり風も出始めワイパーを回転させても前が見えにくい、高速道路は 50 キロ制限になっている。路面もシャーベット状になり始め空も山もグレー調のモノトーンの中、白い雪が舞い落ちてくる。まわりの田んぼも屋根も積雪はない、山の上のほうにかすかに白いものが付いているという感じ。目的地は金沢森本 IC を降り、国道 304 号線を砺波・五箇山の方面へ、県境の峠を越えて 1 キロぐらいのところだ。雪は舞っているが金沢辺りには積雪はまったくない「まさか ゼロでは 雪かきに来たのに」目的地が近づき始めたら、多少の雪は積もっている、点在する家の黒瓦に、敷地の周りに、田んぼに、山に、白い雪がまばらにある。何度もきている家に着くと、雪かきをするぐらいの雪は積もっていた「がはは よかった 雪があった」とひとまずは安心。

鉄のスコップをいつも使っている、勝手知った家の奥からそれを持ち出し「ジャリジャリ」と雪を崩し潰し、横の川にほおりこんでいく。考えてみるとスコップを扱う仕事にはついていたことがないが、子どもころから親やまわりの大人たちが、スコップを土に差し込んでぐいと足で踏みつけ、土をすくい向こうに放り投げているさまを見ていたので、この作業は見ようみまねで子どもころからこなしていた。もっともいつも「疲れた」「しんどい」とすぐにスコップをほおりだしてやめていた。ここには何回来たのか忘れてしまったが、スコップを堅く積もった雪にわり入れ、すくって「よっこらしょ」と投げ捨てる作業が長くつずいても、めげることなく機嫌よく作業を続けている。人が変わったのか、労働体質になったのか、機嫌よくやっている。今年は根雪の期間が短かったようで、積もった上の部分もいつものようには堅くない、スコップを足で踏みつけるまでもなく、ガサリゴソリと崩れ落ち、2 時間ほどで作業は終了してしまった。

雪かきというと、よく TV のニュースなどに出てくる作業は、大屋根の上に人が上がり、スコップなりダンブなりで、屋根の上に積もったフワリ雪を地面に落としている、屋根の上から足を滑らせ自分まで落ちて事故を起こしている。初めてここに来るときも、まさか地面に落ち積もった雪を取りのぞくことがこの辺りの雪かきだとは知らず、大屋根の上でスコップを振るう作業だとばかり思っていた。雪国の背の高い大屋根に上って作業するとは勇壮感はあるが、落ちれば電信柱から落下するぐらいの衝撃でただではすまない。金沢付近のこの辺りの屋根瓦は、上手く釉薬を付け、10 センチも積もればスルリと雪が軒下に落ちる仕組みになっている。雪国ならよその地域も雪が自然に落ちる工夫をなぜしてこなかったのか、不思議だ。

横を流れる巾 10 メートルもない川にはよくカワガラスが飛び交っている。「ジジ」と鳴き声が聞こえ、黒い鳥が川の水面すれすれ右へ左へ猛スピードで移動する。水の中に潜り石の下にいる虫などを捕食するらしいが、飛ぶ姿さえ追うのに必死、何をしているのか、どんな形か、何をくわえているのか、わからない。

前日まで暖かさが続いていたが、ここに来た日から真冬の寒さがぶり返し、昨日も今日も雪が降っている。雪かきの終わったあとへ新雪が積もっている。とはいえ、どうも今年の雪はこれが最後だろう、もう積もらないだろう。不自然な温暖化、加速度的な異変、それこそ「沈黙の春」にならなければいいが。

医王山（いおうぜん）この山が県境、石川県と富山県がある。ここは石川県の有名な山、車道もハイキングコースも整備され、いたるところに地図看板が、トイレが、道しるべもいくつもある。「富山県には 大きな山がいくつもあるこんな低い山なんて」ということかな。富山県の山、劔・立山・薬師・黒部五郎・三俣蓮華・鷲羽・野口五郎・水晶・赤牛とずらずら懐かしい名前が並んでいる。「のぼったなあ しんどかったなあ たのしかったなあ」と思い出が駆け巡る。体力が無くなった今、この季節は無理だが暖かくなれば登りたいネエ。「雨のやまは いやだけれど 雪なら払えばいい 雨具が 濡れにくい」などとほざいていたが、一眼レフカメラの入ったポシェットに雪が積もる、ジッパーのすみから雪が入りこむ、ザックカバーのすみから雪が入りこむ、二重の手袋の中のほうが濡れるとなかなか暖かくなれない、ザックを開け中のものを出し入れのとき、雪の塊りが中に入ってしまう、あれが融けたらヤバイ、山はやはり晴の日がいいネエ。「ああ 濡れかった」と安心しても、大阪に帰って荷を解くと、中のものが全てジットリ湿っている、いつも思うが山は湿度が高いものなんだ。

◎7:30 雪かきの終わった家を出発。昨夜からの雪、積雪 10センチ足らずか、非常に美しい、モノトーンの世界、道路、家屋の壁、針葉樹が黒い色、上に積もった雪が白い色、空までが黒っぽいグレー。少したつと青空見えた。

◎青空が見えているとはいえ、黒い雲もかかっている。電線に雪が積もっている、たっぷり大きい綿帽子がずっと続いて乗っている、これは重そう。今日の登山口は石川県側、見上峠。一昨年は富山県側の福光の祖谷口から、昨夜話を聞くと山頂ではなく医王権現というところまでだったらしい。

◎医王山の山頂は富山県と石川県の県境、山に向かう道路は、「富山県に入りました」「石川県に入りました」とナビ氏がやかましくいう、入り組んでいる。巨大な産廃処理場の区域がある。

◎雪国の道路に水が噴水のようにまかされている。道路の真ん中や左右からぴゅんぴゅん水が飛びだしている。これはなんだと不思議だったが、融雪のための装置、どんどん降り積もる雪を水で溶かして積雪を防いでいる。川の水では冷たくて凍ってしまうから、井戸水を使うとか。知らなかったネエ、この融雪装置は長岡市の人が自社の井戸水が出る付近では雪が解けているのを見て、冬でも暖かい井戸水をまく装置を考えたそう。今ではたくさんの井戸を掘って、雪が降るとパイプから井戸水をまき雪を溶かしている。弊害は地下水くみ上げによる地盤沈下だそう。これの一番豪快な場所は、福井・滋賀の国境の道路、左右から水が飛んでくる、初めて通ったときには何事かと驚いた。

◎雪でまっ白な登山口、ヤッケの上下、登山靴、スパッツ、ザックにワカンとアイゼンをいれ出発。いきなり一歩目から足が雪に潜る。足跡も何もないまっ白な雪原、多少へこんでいるので登山道だろうとけんとうをつけ、10メートル歩いたが潜る。「ワカンを付けたほうがいい」ということでザックからワカンを出し装着。ずぼ足では 50センチ、ワカンでは 30センチ、体重の軽い人のあとを登るとさらに 10センチ、潜るネエ。

◎しばらく歩くと空が明るくなってきた。晴れてきた、空が青い。今まで降っていた新雪がまぶしい。そういえばサングラスのお世話になることが少ない、雪の尾根道を歩くことが少なくなってきた、樹林帯を抜け上へ登る機会が少ない、もうあのギンギラ体験はないかもネエ。今も空が青いとはいえおだやかな照り、新雪の光も鈍い、葉を落とした幹と枝の上に新雪がフワリ、スギの黒い葉の上にポコリ新雪、甘い菓子のような白い雪。

◎1時間ぐらい登ると、吹雪いてきた。風が前から、雪が舞い込む、フードを被りジッパーを上げ、目を細めて歩く、身体の前の方が雪で白い。小屋がある、ハイキング用のトイレ、扉を押し、引くが開かない、避難小屋とも書いてあるが・・・何箇所かの扉、梯子の上の扉も試した。トイレは金具を上げると入れたが、避難小屋にはいけな。外の庇の下でパンを食い水を飲んだ、旨い。せっかくなのでもう少し行こうとするが、吹雪はおさまらない「これは あかん引返しましょう」ということで歩き出した。しばらく下ると、また穏やかな空模様。

◎5人ぐらいの男女グループが登ってきた「ラッセル ありがとうございます」という言葉、懐かしいネエ、「ラッセル泥棒」なんて言葉があつて「おまえは オレの作った踏み跡を そのまま楽チンに登って・・・」と非難する山男たち。冬季の雪山に入ると、有名な山には踏み跡があり、赤いリボンが点在していた。登山部の学生か山岳会の人らが付けてくれていた。「ありがたい」と登らせてもらった。500円の熱い温泉につかった。

最近この福岡ハカセにはまっている。なんだかおもしろい人を探しあてた、いきあたったという感じ。専門の生物学者の話、生物学の内容は難しすぎてわからないけれど、書いているエッセイに引き込まれる。生物学の話をおりませ、その周辺話、本質話、無関係話の展開がおもしろい。先日なくなった吉谷君が二十歳ぐらいのころに「小林秀雄にたらしこまれている すべてのが 彼につきあたる」なんてことをつくづくいっていた。大げさなことをいうやつだと思っていた、もっとも、オレ、小林秀雄は読んでいなかったし、先日もパラリ本をめくったが、すぐにそっと書架に返してしまった。話好きの彼が、「なぜ はまっているのか」酒を飲みながら“うじゃうじゃ”語っただろうとは想像するが全て忘れてしまった。明治・大正時代の大先生の話は、いかにも抹茶くさい、若い先生の話は専門が細分化されすぎてわからないところが多すぎる、なんて自身の浅はかさ、教養のなさを棚に上げ、屁理屈をこねているが、楽しいヒトにめぐりあえた、まずはめでたし。

ハカセ：この世界に現れる何か素晴らしいことを書き留めるためには、そのなにかの動きを止めなければならない。なにかの命を封じなければならない。そうしないことには私たちはその対象物をじっと見つめることができないのである。人間は、動いているものを動いているままに追いつけることを、記述することができない。これはある意味で近代の科学が、ずっと行ってきたことであり、近代の思考がいつもおちいつてきた陥穽（落とし穴・はかりごと）でもあった。しかしほんとうに大切なことは、私たちが知ろうとする対象物の本来の実相は、むしろ、私たちが止めてしまった動きの方にあるのではないか、動きの中に本質があるのでないか、そのような恐れと反省が、生物学を研究してきた私のまわりにいつも現れては消えていった。

この話はおもしろい。人が見えるもの、感じるもの、「おお これだ」「これを 探していた」といった瞬間にその本質がなくなっている、どこかに移ってしまっている、これだというものは本質の単なるヌケガラ、虚構に過ぎないとおっしゃる。科学の世界ではいざ知らず、創造の世界では、何が本質で、何が本質でないかさえもわからない。いやむしろ、本質もほんとうも、嘘もだましもありはしない。いつでもどこでもタユタユとした流れがあるだけ、絶え間なく流れている、早い遅いもわからない、時間も場所もわからない、が確実に流れている。その流れだけが本当なのかな。

ヒトは ゆれゆられ 右へ左へ 上へ下へ 流れる そっちへいく そっちが どこかは 知らないけれど
流れる ひとつひとつの 魂なのか 精神なのか 想いなのか 流れていく

ハカセ：ポアンカレが100年前に「数学という 存在自体が 解けない 矛盾 のように 思われる」ハカセは数学ほど厳密な理論と証明で構成されている完全な科学はないと思っているが「解けない 矛盾 とは」とはなに。ハカセの生物学ではその研究において「理論と証明」がある。生物学の証明は、実験によってなされる。仮説という名の論理は、頭の中で組み立てられる。この仮説を、実験によって確かめることによるのみ、仮説の証明が成立する。ところが数学は実験することが許されない。数学者も仮説を頭の中で組み立てる、その証明も頭の中でおこなわれる。頭の中でとどまるかぎり、空想上の絵空事にすぎないはずの仮説がいかにか証明されるのであろうか。ポアンカレは「数学は 解けない 矛盾」「数学は 壮大な 同義反復に 帰着するのではないだろうか」と述べている。

若いころ、数学がおもしろいほど解けると思った次期があった。設問を見「ああ これは ああして こうして・・・」というようにひらめき、3行か4行の数式を書けば正解だった。これは“カン”の学問だとおもった。けれどまわりに何人かもっとすごいヤツがおり、見たこともないような数式を黒板に書いていた。すごいと思っていた彼らが大学に行くと「もっとすごいヤツがたくさんいる」と嘆いていた。オレのことだけれど、星を見たい、虫を見たい、花を見たい、顕微鏡を覗きたい、試験管を振ってみたい、そういうことを思ったことがなかった。70歳近くになっても、付き合っている理系の何人かのヒトは、そういう夢の話はいまだに語っている。